

## 方言談話における接続詞のはたらき

——山口県豊浦郡豊北町阿川方言の

「だから」について——

住 田 幾 子

### はじめに

山口県豊浦郡豊北町阿川方言には、順接の接続詞「だから」に相当するものとして数種の方言語形が存立している。

まずは、これらの語について、造語法に観点置いて整理を行い、その差異を検討する。

つぎに、自然談話の資料をもとにして、「だから」の類が、談話上、どのようにはたらくかを見る。接続詞が承ける前言と、接続詞がしたてる後言とのあいだの、談話上の文の組みたてに観点置いて、談話法の類型をとらえようとするものである。

とりあげた談話資料は、文化庁の行った山口県方言緊急調査（昭和53年度～昭和55年度）の際の録音を文字化したものである。当方言の談話資料をとりあげたのは、量的にまとまった自然談話の資料であることと、私自身が録音・文字化の作業にあたり、その場の事情をよく理解することができるからである。

談話の録音文字化の時間 約9時間

談話の文字化枚数 976枚 (30×13)

談話の種類

I 対談 2人ないしは3人で、ある話題のもとに自由に語りあう (17話題・約300分)

II 会話 ①仕事場(漁場)でのやりとり (1場・約60分)

②挨拶の場面でのやりとり (25場・約120分)

III 独話 子どもに昔話を語る (11話・約60分)

なお、この山口県方言緊急調査の文字化資料を使用するにあたっては、文部省文化庁国語課の許可を得た。

### 一 阿川方言談話に見られる「だから」(順接)の方言語形

阿川方言談話の文字化資料において、順接の接続詞「だから」に相当するものとして得られた方言語形は、表1に掲げたとおりの19語である。これらの語の共通語訳には、すべ

て「だから」をあてた。

語構成上、大きくは、

- A 指示語を構成要素として持つもの
- B 指示語を構成要素として持たないもの

の二とおりに分けられる。

Aの内訳は、さらに、

- ① 指示詞「ソレ」を構成要素とするもの
- ② 指示詞「ソ」を構成要素とするもの

とに分けられる。

指示詞以外の構成要素は、断定の助動詞「だ」の類と、助詞「から」の類とである。表1は、19の方言語形を、

A—①「ソレ」「ホレ」など(指示詞) + 「ジャ」(助動詞・断定) + 「カラ」「ケン」「ケ」(助詞)

A—②「ソ」「ホ」など(指示詞) + 「ヤ」(助動詞・断定) + 「カラ」「ケ」(助詞)

B 「ジャ」「ダ」(助動詞・断定) + 「カラ」「ケ」(助詞)

の3類に分けて整理したものである。

「A—①」に属する語には、「ソレジャカラ」をはじめとして、「ソレ」が音化した「ソエジャカラ」「ソイジャカラ」があり、また、「ソレ」の縮約と判断される「ソジャカラ」なども存立している。あるいはまた「それ」の方言形「ホレ」を構成要素とする「ホレジャカラ」「ホエジャカラ」「ホジャカラ」なども見られる。さらには、助詞「から」の「ケン」「ケ」を構成要素とする「ソエジャケン」「ソレジャケ」も得られた。

当方言では、準体助詞「ソ」「ホ」が両存しており、接続詞の構成要素となる指示語にもまた、「ソレ」と「ホレ」とが併存している。接続助詞においても、「カラ」と「ケ」(「ケン」も聞くが、「ケ」のほうがさかんである。)との両者がある。在来のもは「カラ」であり、「ケン」「ケ」などは、九州方言の進入と考えられる。

「A—②」に属する語には、「ソヤカラ」「ホヤカラ」「ソヤケ」「ホヤケ」などがあり、指示語の「ホ」の変化した「ヘヤカラ」も存立している。助動詞「ヤ」が音化した「ソイケ」「ホイケ」も聞かれる。

「A—①」と「A—②」との差異は、一つには指示語の「ソレ」「ホレ」と「ソ」「ホ」との違いにあり、二つには、断定の助動詞「ジャ」と「ヤ」との違いにある。

さて、「B」に属する語には、「ジャカラ」「ジャケ」「ダカラ」の3語がある。このうち、「ダカラ」には、話者に共通語使用の意識が感じられた。方言形は「ジャカラ」「ジャケ」の2語である。構成要素である断定の助動詞は、いずれも「ジャ」であり、「ヤ」とはなっていない。

方言談話における接続詞のはたらき

以上、阿川方言における順接の接続詞「ソレジャカラ」類、「ソヤカラ」類、「ジャカラ」類の存立について、造語法の観点から分類し整理を行ってみた。

Aの指示語を構成要素として持つ場合と、Bの指示語を構成要素として持たない場合とでは、Bが強調表現に使用されるという表現法上の差異が認められる。

Aに属する①の「ソレ・ホレ」+「ジャ」+「カラ・ケン・ケ」という造語法のもの、②の「ソ・ホ」+「ヤ」+「カラ・ケ」という造語法のものとの表現上の差異は、明確にはとらえがたい。両者の用例を見くらべていると、一つの傾向が認められるようでもある。①類の語と②類の語との用例の幾つかに、前言の意味内容のとらえ方に差異があるということを感じさせるものがある。それは、「ソレ・ホレ」を構成要素とする語が指示する場合は、前言の意味内容を、「具体的な個々のできごと」としてとらえ、対して、「ソ・ホ」を構成要素とする語が指示する場合は、前言の意味内容を、社会的通念など

表1

語形	性別 話者 生年	男 性										女 性						
		A	C	F	G	H	I	K	M	N	a	b	c	d	e	f	g	
		明治 22	32	43	44	44	大正 2	12	昭和 9	24	明治 29	33	38	40	44	大正 1	3	
A ①	ソレジャカラ	21			1	1	8		1	1				3		6		
	ソエジャカラ	12	1			2	2		1	1			2			2	1	
	ソイジャカラ	1		1														
	ソジャカラ	24	2	2		3	8			7					1		1	
	ホレジャカラ	2														2		
	ホエジャカラ	5		1					2		1					1		
	ホジャカラ	10		2	1	2	1			3						1		
	ソエジャケン	2															2	
	ソレジャケ	2														2		
A ②	ソヤカラ	47		1	1	10	8	6		4	7	1	2	2		4		1
	ホヤカラ	72	1	1	1	20	5	1	1	8	2	5	15	5	2	4		1
	ヘヤカラ	3		3														
	ソヤケ	3					1	1				1						
	ソイケ	4					1	1				1					1	
	ホヤケ	13				2	2		1	2		1	2			3		
ホイケ	7					1					1		1		3			
B	ジャカラ	9		1		3		1		2		1			1			
	ジャケ	1									1							
	ダカラ	1														1		

「一般的なことがら」としてとらえているということである。しかし、その区別が判明しない用例もあるので、問題として残される。

表1には、この調査における話者の「だから」の使用状況も掲げている。個人別、性別、生年順に整理してみた。この表をもとに、「ソレジャカラ」類と「ソヤカラ」類との、使用上の差異の有無を検討してみたい。

話者I・bには、「ソレジャカラ」類の使用はなく、どちらも、「ソヤカラ」類をもっぱら使用している。他の話者を見ると、「ソレジャカラ」・「ソヤカラ」の類の両方を使用しているが、談話の種類、話題、話者の立場による発話数の多少等、資料に限りがあるので、個人差があると言いきることはできない。男女による使用差も、特に認められない。年層差はどうだろうか。話者は主として老年層である。調査当時、K・Mが中年層で、Nが青年層である。三層ともに、「ソレジャカラ」類、「ソヤカラ」類を使用している。年層差も特に認められない。

## 二 接続詞「だから」の談話法

接続詞のはたらきは、一般的に、

表わす二つ以上の事柄・事柄の関係について話し手の認定・気分などを示す。

(1963 西尾実 岩淵悦太郎編『岩波国語辞典』の品詞概説 P1094 岩波書店)  
ものであろう。その中の順接の接続詞「だから」のはたらきについては、

先行の事柄の当然の結果として、後続の事柄が起こることを示す。

(1976 『日本国語大辞典』小学館)

とあり、まずは、これに同意するものである。

これらを前提にして、自然談話資料をもとに、阿川方言の「だから」の類の語が、談話構成上、どのようにはたらいているかを見ていきたいと思う。

「だから」のみちびく後言（後続の事柄）が、前のどの発言（先行の事柄）を承けているかという点に注目すると、前言が、

- 1 自己の発言内容である場合
- 2 相手の発言内容である場合
- 3 自己の発言と相手の発言とが複合した内容である場合

との、三者が認められる。

さらに、1においては、

- (1) 後言が同一発話内の前言を承ける場合
- (2) 前言と後言とのあいだに、相手との発話の交代が行われる場合

とがある。また(2)においては、「後続の事柄」を述べる発話の開始に注目すると、

- ① 応答文で始まるもの
- ② 「だから」の類で始まるもの

との、二つの類型が認められる。

## 1 自己の発言内容を承けるもの

### 1-1(1) 同一発話内の発言を承ける場合

接続詞「だから」の類が文頭に立つ文（後続文）が指示する先行の発言が、ひとりの話者の同一発話内にある用例から見ていこう。

I 略。ムカシー ココ マー ムカシテモ オームカシ、コーボーサンガ ココー ア  
トーラレテ、コノヘンノ モノガ ミズガ ナー。ミズガ ナーユエテ ソノー  
コマツョッタ ヨ。ホイタラ コーボーサンガ ココ ホツテミツテ ユエテ  
アノー ツエノ サキデ ノ。アノー ホツチャッタ。ソレガ アノー ソノ イド  
ジャゲナ。ソヤカラ ドネーナ オーケナ オービヤケイ ナツテモ ココノ ミズ  
ガ キレル コトア ア ア ゼツタイ ナー。〈Ⅲ 土井ヶ浜の民話〉

I 昔、ここ、まあ、昔といっても、大昔、弘法さんがここを、ア、通られて、この  
辺の者が「水がない。水がない。」と言って、ソノー、困っていたのさ。そうし  
たら弘法さんが「ここを掘ってみろ。」って言って、アノー、杖の先でね。アノ  
ー、掘られた。それが、アノー、その井戸だそうだ。だからどんな大きな大日照  
りになってもこの水がきれることは、ア、ア、ぜったいにない。

がある。子ども相手に聞かせる昔話（独話）の中の用例である。接続詞「ソヤカラ」は、  
先行の自己の発言内容を承け、その発言は、同一の発話内にある。

f ズーット ムカシカラ コノヘンダゲニ ツタワル カンスコロゲノ ハナシジャガ  
ノ。タスキノ オーバト イチバノ ヘンニ ンー サカヤイノ ヘンニ ネ。トリ  
ゴエチュー トコロガ アツタンヤケド。ムカシャー ソリヤー ヒトドーリノ  
スクナイ サビシー トコロジャッタガ、ドヒーシ キレーナ ヤマミズガ チョ  
ロチョコ ナガレデテ ニンゲンデモ アー ウマズレノ モノデモ ココマデ  
クルト コノ ミズー イッパイ アンデ カオー アロータリ テアシオ フイタ  
リ シテ ヒトヤスミ シタ モンジャ。ソエジャケン ノ。ココー ウマノ ミズ  
ノミバッテ イーヨツタンジャ ナ。〈Ⅲ カンスコロゲ〉

f ずっと昔からこの辺だけに伝わるカンスコロゲの話だがね。田畑の大庭と市庭の  
辺に、ンー、境いの辺にね。鳥越という所があったんだけど。昔は、それは人通  
りの少ない寂しい所だったが、とてもきれいな山水がチョコロ流れ出て、人  
間でも、アー、馬連れの者でもここまで来ると、この水を一ぱい飲んで顔を洗っ  
たり手足をふいたりしてひと休みしたものだ。だからね。ここを馬の水飲み場っ  
て言ってたんだね。

は、前の例と同様の独話での用例であるが、この例では、「ソエジャケン ノ。」と、接  
続詞「ソエジャケン」に、文末助詞「ノ」が続いて一文をなし、後続の文との間に、一呼  
吸が置かれている。はなしことばにおいては、このような例もよく見受けられる。

つぎの例は、やはり、同一発話内の自己の発言を承けるものではあるが、話者二人によ

る対談におけるものである。

e ハー。ホシテ ヒトバツカリ アツマツテ ノミクイノ ホーエ。アノ フクダ  
ナンカー ナオサラコソ シンリイガ ナイカラ。デー。ダカラ アレホドニ アツ  
マランデモ エーテユーテ シコーガ ワカレタホジャ。

H ハー。

e タチメト ナントイ。〈I 若い頃の話〉

e はあ。そして人ばかり（葬儀に）集まって、飲み食いの方へ。アノ、福田なんか  
なおさら親類がないから。デー。だからあれほどに（人が）集まらなくてもいい  
といって死講が分かれたのだ。

H はあ、はあ。

e 立目（部落）と何とに。

では、接続詞「ダカラ」が承ける意味内容は、自己（話者 e）の同一発話内における連文  
じたてのものとなっている。

#### 1-(2) 相手の発話が挿入される場合

「先行の事柄」と「後続の事柄」とを述べる話者の発話の中に、相手の発話が入り、前  
言と後言との間において、発話の交代が行われる場合がある。

e アノー カシラノコガ ウマレテ ネー。

H ウン。

e コンドノ トシノ フユキューカカ ソノ モーヒトツ アエエダ オイテ カネ。  
ジゲノ ヒローオ シテヤッタ。

H ウン。

e ハー。ソレジャッタ。ソヤカラ ジゲノ ヒロー シタ トキニャー アノ コガ  
ウマレテョッタ モン。

H ハー。

e ハー。〈I 若い頃の話〉

e アノ、一番上の子が生まれてねえ。

H うん。

e その年の冬休暇か、そのもう一年、間をおいてかな。村の（結婚の）披露を（夫  
が）された。

H うん。

e はあ。そうだった。だから村の披露をした時には、あの子が生まれていたもの。

H はあ。

e はあ。

の例では、話者 e の「ソヤカラ」が指示する先行の意味内容は、同じく e の前言にある  
が、その前言に対し、相手の話者 H が同意を示し、「ウン。」という応答文で発話が交代  
する。さらに話者 H の応答を承けて、e が、「ハー。ソレジャッタ。」と応答し、また発

話が交代する。このeの応答は、自己の前言と、それに対するHの同意とを承けるものである。自己の前言と相手の応答とを取り込んで承けていくのが「ソヤカラ」のはたらきとなっている。このほか、相手の同意を得ながら、自己の応答文で発話が始まるものに、

G ソレカラー アノ ハエエキューショモ。

H うん。

G タバコノ ハエエキューショモ (H うん。) アッタ ヨー。

H うん。

G うん。 チョットシタ インショクテンガ アリヨッタ エー。 ヘヤカラ ヤツポ  
ヒッカケテ モドリヨッタ イ。 <I 大音金山の話>

G それから、アノ、配給所も。

H うん。

G たばこの配給所も (H うん。) あったよ。

H うん。

G うん。ちよっとした飲食店があったよ。だからやはり一ぱい酒を飲んで帰っていたよ。

などの例もある。

相手の同意の発話が、応答文のみではなく、

H ハー。 マー ソーユー トキジャツタカラ マダ カナエエガ キチヨル トキニワ  
デンキガ ツイテ ナカッタ。

e ハー。 ダエエブ オソカッタ。

H ハー。 ソヤカラ ソノーコロニワ ソノー ナニー ナ。 マー マデニワ ソノー  
ダンブジャツタ ワケ。 <I 若い頃の話>

H はあ。まあ、そういう時(嫁入りの晩、遠くから電線を引いて仮りに電気を付けて結婚式の宴に備えたということ)だったから、まだ家内が(嫁入りの行列で)来ている時には(この部落には)電気がついてなかった。

e はあ。(立目部落は電気になるのか)遅かった。

H ああ。だからその頃には、ソノー、何だな。まあ、(妻が嫁に来る頃)までには、ソノー、ランプだったわけ。

のように、同意の「ダエエブ オソカッタ。」という文が添えられる場合もある。また、

G イネガ ジョーブナチャー コト。

a ジョーブナ。

G ハー。 ホヤカラ イママデ シタソアー カモワン。 イマカラ コンドー ヨースイ  
ケーモーキ ナツテ ナー。 ミズガ アリサエ スリヤー モー ホーサクチャー。

<I 箱苗の話>

G (箱苗の苗は) 稲が丈夫だということ。

a 丈夫だ。

Gはあ。だから今までにしたのは(苗が小さくても)かまわない。今から 今度、用水形成期になってなあ。水がありさえすればもう豊作だという。

の例は、相手 a の発話が、応答文ではない場合である。しかし、a の「ジョーブナ。」という発言は、G に対する同意を表明した応答表現となっているよう。

以上は、「後続の事柄」を述べる発話が、自己の応答文で始まるものである。

つぎに、「後続の事柄」を述べる発話が、接続詞「だから」の類で始まる例を見ていく。

G ホレカラ タンコーデ ヤッポ アラマシナ シゴト シチョルカラ ナー。

H ウーン。ウン。ウン。ウン。

G ホジャカラ イドグライノ コトワ ヘーチャラジャー。

H アー。ソリヤー マー ソレ。

G ハー。ドネーモ ナエエ エ。〈I 大音金山の話〉

G それから炭坑でやはり荒っぽい仕事をしているからなあ。

a うーん。うん。うん。うん。

G だから井戸(掘り)ぐらいのことはへっちゃらだあ。

a ああ。それは、まあ、そうだ。

G はあ。なんともないよ。

の例がある。G の「ホジャカラ」で始まる直前の発話は、相手 a の応答文となっている。このほかにも、

b ハー。ヨー デキタ ムスメサンジャゲナツ チャ。

c ハー ハー。ホント ネー。

b ホヤカラ ナー。アノー ヤッパ セワー シテノ ヒトモ ナンジャゲナツ チャ。エー ムコサンオ シンバイシチャッタチュ ハナシ イナ。〈I② うわさ話〉

b はあ。よくできた娘さんだそうだってよ。

c はあ、はあ。まったくねえ。

b だからねえ。アノー、やはり世話をされる人も何だそうだってよ。いい婿さんを世話されたという話よ。

などがあり、「ホヤカラ」で始まる b の発話の前の、相手 c の発話は、「ハー ハー。」と「ホント ネー。」との二文じたての応答表現となっている。また、

A インヤ。ソリヤー ナー。コノゴロワ ハー ワタシャー ナニ ノ。アノー トシュー サカシー ユー イノ。

N エー。オー ソレ カナ。オッカシート オモータ ヨ。

A ホエジャカラ シガツノ ヨーカデ (Gウン。) コンダー アノ タッタ ヒー テチガイド ナニ ノ。ゴジュー ハチガ ロクジュハチ チッテシマウ。

〈I 河内部落の話〉

a いいや。それはねえ。このごろは、はあ、私は何だよ。アノー、年をさかさまに

言うのよ。

G ええっ。おお、そうかい。おかしいと思ったよ。

a だから、四月の八日で（Gうん。）アノ、たった一日ちがいで、何だよ。58が68になってしまう。

などの例もある。Gの「エー。 オー ソレ カナ。 オッカジート オモータ ヨ。」という発話も、やはり、aの発話に応答するものである。

二人以上の対談においては、「後続の事柄」が自己の発言内容（「先行の事柄」）を承ける時、相手の「先行の事柄」に同意する表現をも取りこむ場合が多い。相手が自己の前言（「先行の事柄」）を認めることで、「当然の結果」として「後続の事柄」を述べたてることができるのもあろう。

## 2 相手の発言内容を承けるもの

二人以上の談話においては、「後続の事柄」を述べる話者と、それに対応する「先行の事柄」を述べる話者とが異なる場合がある。

a ウシガー マー ヒト マチ ホナ ゴヘン ハエ エラン ニヤー タガ ウエラ レン。  
H マー ヒド エ キョク タン ナ タワー ゴヘン モ ロッ ペン モ ハエ エル タガ  
アル。

G ソレ イ。 ソ ジャ カラ ナ ニ ー ナ。

a フーン。

H ウン。 ソ ラ ー モ ー コ ー セ ン オ ミ タイ ニ チャ ワ ン ナ カイ コ ー セ ン オ カイ  
テ ド ロ ド ロ エ ナ ツ タ ー ソ ネ ー セ ン ニ ヤ ー モ ー ミ ズ ガ パ ン エ ツ ー ジ  
テ タ カ ー ト コ ロ ノ タ ワ モ テ ン。

G ミ ズ ガ モ テ ン。

a ミ ズ モ チ ガ ワ ル イ。 <I 農業の今昔>

a 牛が、まあ、一町に、それなら、五辺入らないと田が植えられない？

H まあ、ひどい、極端な田は五辺も六辺も入る田がある。

G そうさ。だから、何だな。

a ふうん。

H うん。それはもう香煎みたいに、茶碗の中に香煎をかきまぜてドロドロになった、そのようにしないと、もう水が盤へ通じて高い所の田はもてない。

G 水がもてない。

a 水もちが悪い。

が、その用例である。Gの「ソレ イ。 ソ ジャ カラ ナ ニ ー ナ。」という発話は、直前のHの発話の意味内容を承けている。「後続の事柄」が、自己の発言を承けるのではなく、対談の相手の発言内容を承けるのである。「ソジャカラ」を含むGの発話は、「ソレイ。」という応答文で始まり、接続詞「ソジャカラ」が続く形式となっている。

Mソリヤー ソノコロ ヤッパ ショーカソソジュクグラライノ キガマエデ オツ  
タカモシレン ソナ。

Nソラ ソーカモ シレン。イヤ。ジャケ ナンテユー ジュクジャロー カ。カンテ  
ユー ナンテユー ナマエ エー ヒトガ デタロー カエト オモエテ キーテミ  
ヨート オモエテ。ヒトツ。〈I 父親のこと〉

Mそれは、そのころ、やはり、(私の父親は、自分の塾に対して) 松下村塾ぐらい  
の気がまえていたかもしれないよ。

Nそれは、そうかもしれない。いや。だから、何ていう塾だろうか。かんでいう、何  
ていう名前、いい人が出たのだろうかと思って、聞いてみようと思って。ひとつ。

は、Mの発話の内容をNが承けたものである。Nの発話は、「ソラ ソーカモ シレン。」  
と応答文で始まるが、「イヤ。」という否定の応答文が続いている。この場合、「ジャケ」  
という指示語を構成要素に持たない語が使われている。「イヤ。」というのは、Mの発言  
を否定するのではなく、むしろ強く肯定するものである。「ジャケ」には「だからこそ」  
の意が感じられる。「ジャカラ」「ジャケ」は、強調表現をしたてるものようである。

H略。ソレカラ トーイモノー ソノー トツテキテカラ アノー コー ヤエエテ  
クエテ オゴラレタリ。マ コーユー ヨーナ コトデカラ マー カネツテユー  
モア ソノカワリ ヤハリ ソノ セーヒンオ カワシカラ ナ。

eイラザッタモン。ネー。ホヤカラ オテラエ ツレテマエエツテ モラヤー アノー  
モンノ トコロデ (Hハー。) コンペーターデモ (Hウン。) コネー ガラスコッ  
プデ ハカッター (Hウン。) サカズキデ ハカッター。

Hウン。

eホエカラ オマツリーデ サンセンカ ゴセンジャロー ネ。ゴズカイ モロテ  
マイリヨッタホワ。〈I 食べ物の話〉

Hそれからさつまいもの、ソノー、とってきて、アノー、コー、焼いて食って叱ら  
れたり。ま、こういうようなことで、まあ、金っていうものは、そのかわり、や  
はり、ソノ、製品を買わないからな。

eいらなかったもの。ねえ。だからお寺へ連れて参ってもらえば、アノー、門の所  
で (Hはあ。) コンペイトーでも (Hうん。) こんなガラスコップで計ったり  
(Hうん。) 盃で計ったり。

Hうん。

eそれからお祭で三銭か五銭だろうね。小遣いをもって参っていたのは。

は、「後続の事柄」を述べるeの発話が、応答詞による応答文で始まっていない例であ  
る。しかし、eの「イラザッタ モン。ネー。」という発言も、直前のHの発言内容に  
応答するものである。したがって、これも、「応答文+接続詞～」の発話の形式としてとら  
えられよう。

つぎに、接続詞で発話が始まる形式のものをあげる。

M エー ダイブ ナンネングライ ジュク ヤッタ。 サー マー ジューネングラヤ  
イワー ジュク ヤッチョッタ ンジャロート オモー。

N ウン。 ソレワ ヤメラレタノワ。

M ソジャカラ ジューハチネンゴロ シンジョルカラ ネ。

N アー。 アノ ナクナラレテ ヤメラレタッテ コトデス カ。

M ソー ソー。 <I 父親のこと>

M ええつと、だいぶん、何年ぐらい（父は）塾をやったか。さあ、まあ、十年ぐら  
いは塾をやっていたのだらうと思う。

N うん。それはやめられたのは。

M だから、（昭和）18年ごろに死んでいるからね。

N ああ。アノ、亡くなられてやめられたってことですか。

M そうそう。

がある。Mの「ソジャカラ ジューハチネンゴロ シンジョルカラ ネ。」という「後続  
の事柄」が承ける「先行の事柄」は、直前のNの「ソレワ ヤメラレタノワ。」である。  
「後続の事柄」を述べるMの発話は、接続詞「ソジャカラ」で始まっている。

「後続の事柄」を述べる発話が、接続詞「だから」の類で始まる形式も多く見られて、  
談話法上の一つの類型として認められる。

### 3 自己・相手の発言が複合された内容を承けるもの

2人あるいは3人以上の対談においては、後言の「だから」が承ける意味内容が、自己  
の前言と相手の前言とが複合されたものである場合がある。たとえば、次の例が見られる。

b ホヤケド ヤッポ ボンオドリダケア セーダイニ。 キョーモ イーチムラサンガ  
コネ ユーテヤッタ ソ。 アノー バーチャン エー。 ヤッポ ヒトバンジャー  
タランマー ナッテ ユーテヤカラ。 コノ イーチムラサン エー。 ヒトバンデ イゲ  
ル モノカイナ。 ナンボ スクノーテモ アンタ フタバクライワ アンタ  
ナケランニャー。

c マエニ アンタ ジューヨッカ ゴンチ ロクンチト ミッカグライ アリヨッタ  
ロー ガナ。 ナ。

b ミッカ アッテ ジューヒチヤガ マタ アッタ ホイ。

c アー。 ジューヒチヤノ カンノンサマノトキ アリヨッタ イナ。

d ソシテ ニジューヨッカガ アリヨッタカラ ナ。

b ヨッカガ アリヨッタ イナ。 ウーン。

d ホエエデー ダイブン タラウホド アリヨッタ。

c ヘテ コンダ ニジューヨッカノ ジゾーマツリトデ オドリヨッタ イナ。

b ハー。 ホヤカラ エカッタケド コノゴロー ナンタチャ サビレタカラ。 略。

<I 盆の話>

b だけど、やはり、盆踊りだけは盛大に（やってほしい）。きょうも市村さんがこう言われたの。「アノー、ばあちゃんよ。やはり一晩じゃ足りないだろうね。」って言われるから。「市村さんよ。一晩ではいいものかね。いくら少なくとも、あんた、二晩くらいはないと……。」

c 以前に、あんた、14日、15日、16日と、三日ぐらいあっていただろうがね。ね。

b 三日あって、十七夜がまたあったのよ。

c ああ。十七夜の観音様の（祭の）時に、（盆踊りが）あってたよね。

d そして24日があったからね。

b 24日があったよね。うーん。

d それでだいぶん飽きるほど（盆踊りが）あった。

c そして、今度は、24日の地藏祭とで踊っていたよね。

b はあ。だからよかったけど、ちかごろは、なんといつてもさびれたから（いけない）。

これは、「盆の話」での一つの話題で、盆踊りの衰退を嘆くくだりである。用例の最後のbの発話の「ハー。ホヤカラ エカッタケド〜。」が承ける前言は、bの「盆踊りだけは盛大に踊るようであってほしい」、cの「以前は14日・15日・16日と三日ぐらい踊っていた」、bの「17夜にも踊った」、dの「24日にも踊った」などが複合されたものである。自然談話においては、複数の話者の発言を総合させた意味内容を「だから」で承けるということも行われている。

## おわりに

以上、主として、自然談話上の「だから」のはたらきについて、「だから」が承けるものとその発話の形式とに注目して実態の把握に努めた。ここに、接続詞の談話法的一端を見ることができたと考える。

今後は、「だから」以外の他の接続詞をも全般的に検討し、共通語との比較を行いたい。

この稿をなすにあたっては、岡野信子先生の示唆をいただいた。また、第17回広島方言研究所ゼミナールでの口頭発表の際にも、参会の方々に教えをいただいた。記して感謝申しあげる。

## 〔注1〕

「発話」については、杉戸清樹氏の

ひとりの参加者のひとまとまりの音声言語連続

という考えを参考にしている。（1987『談話行動の諸相 座談資料の分析』国立国語研究所編、「Ⅱ分析編」の2.2. 発話のうけつき」P 83）この稿の場合は、ひとりの参加者が発言を承けつき、つぎの話者に交代されるまでのあいだを、1つの発話としてとらえている。